

小学校における外国語活動の効果的な進め方の研究

高知大学大学院 総合人間自然科学研究科 教育学専攻 学校教育コース 内田研究室
高知市立第四小学校 教諭 川越 美和

1 はじめに

これまで、総合的な学習の時間の一環として英語活動を行ってきた学校の取り組みは数多く報告されているが、外国語活動の取り組み報告はまだまだ少ない。外国語活動は平成 23 年度に完全実施になったばかりであり、多くの学校が手探りで実践を進めているのが現状である。そのため、外国語活動は総合的な学習の中で取り込まれてきた国際理解のための学習や英語活動とどう違っているのか、どう変えていかなければならないのかという疑問や不安感は、現場の教職員から払拭されてはいないと思われる。初期の英語活動で多く見られた、「大きな声を出して繰り返す」、「クラスが盛り上がりたばよい」といった授業に対しては、懐疑的な声が多く聞かれるようになり、外国語活動の意義を明確にすることが求められるようになってきている。

2 研究目的

本研究では、小学校における外国語活動の効果的な進め方を示す。例えば、指導方法、指導内容、この指導における児童や指導者の役割などを明らかにする。

新学習指導要領が完全実施となり、多くの学校現場では、副教材である「英語ノート」をもとに学級担任主導の外国語活動が行われている。しかし、様々な調査では自分の行っている授業に対して不安や負担感を感じている学級担任が多数いることが明らかになっている。そこで、外国語活動の効果的な進め方を明らかにし、実際に指導に当たる現場の学級担任等が、前向きに外国語活動を行う体制づくりにつなげたい。それが、1人でも多くの児童の学びを保障することにつながると考える。

3 研究内容

効果的に進めるために有効ではないかと思われる手法について、先行研究から手掛かりを探っていた。それらの中から Cooperative Language Learning (協同言語学習) とプロジェクト型外国語活動 (東野・高島 2007) を選択し、それらを基にした新しい指導方法の開発を行うことにした。

新指導要領でも強調されているように、学習における意欲や自律性は、児童の今後の学習を支えるものであり、指導において最も大切にされなければならない事柄である。コミュニケーション能力の育成が社会的にも大きな課題になっており、これを育成するための指導法の工夫も求められている。

協同言語学習は、この観点から、外国語活動にとって有効な指導法であると考え。言葉は本来自分の考えを整理したり、人と心を通わせたりするための道具である。であるならば、言葉を覚える為だけの勝敗のあるゲームに終始するのではなく、協同的に課題に取り組み、その中で言葉を使う喜びが感じられるようにすることがより良い方法であると考え。

協同学習を行うためには、共に取り組む必要と価値のある課題を設定することが大切である。そのためにプロジェクト型外国語活動で行われるタスク活動を取り入れることが有効であると考えた。主体的・創造的な学びが養えるのがプロジェクト型外国語活動であり、児童が学習の主人公になれるのが協同学習である。この2つの学習の要素を組み合わせた Cooperative Learning (協同学習) 型外国語活動(以下、CL 型外国語活動)を考案し、実践によって成果と課題の検証を行い、CL 型外国語活動の視点を再考することによって、指導法の全体像や外国語活動の効果的な進め方について明らかにしていく。

4 CL型外国語活動の考案

研究協力校A・B小学校の2校、5・6年生において、指導者と共に単元及び指導案作りを行った。単元及び指導案作成は、「英語ノート」を主教材とし、「外国語活動指導案集」（高知市教育委員会）を改訂しながら行った。外国語活動の授業は、学級担任とALTやJETによるティーム・ティーチング、又は学級担任単独で行った。ティーム・ティーチングの際の主たる指導者は学級担任であった。

そして、授業観察や授業後の児童のふりかえりカードの集積及びプロセスレコードにより、その効果や課題を整理し、次の指導案作成に生かすようにした。このようなサイクルを繰り返していった結果、取り入れたどの単元においても外国語活動の3つの柱に迫る児童の記述が見られた。これにより英語ノートの単元を取り入れることが効果的であることが分かった。また、協同的に行う活動により児童が積極的に授業に参加でき、創造的な活動により児童に主体性が生じることが明らかになった。

また、各学期終了後に児童及び学級担任にアンケートを行い、学級担任にインタビューを行いながら裏付けを行った。これらの結果、協同的活動や創造的活動、ふりかえり活動を取り入れることで、児童に主体性が生じることや積極的な授業参加が増えることが明らかになった。

主たる指導者である学級担任にとっても、その特性を生かした指導を行うことができるものであった。ここから、Cooperative Learning（協同学習）型外国語活動の次のような視点が見えてきた。また、単元作り及び授業の展開例は次の通りである。

表1 CL型外国語活動の視点

CL型外国語活動のポイント	
①	指導者と児童が協同で授業を行う。
②	ペアやグループが協同で行える活動を含む。
③	競争よりも協力を重視した活動を含む。
④	授業の目標を明確にする。
⑤	ふりかえりの時間を充実させる。
⑥	自己表現の場面を設定する。
⑦	学習の流れを児童に示す。

表2 CL型外国語活動の単元づくりの流れと授業の展開例

CL型外国語活動の単元づくりの流れ	
1	単元の目標を3つの評価の観点に照らしながら、具体的に決める。 ・コミュニケーションの関心・意欲・態度 ・外国語への慣れ親しみ ・言語や文化についての気づき
2	ゴールとなる活動を設定する。 (タスク活動やスピーチ発表等、ゲームではなく、児童が自分の本当の想いを伝えられるような活動)
3	3つの評価の観点それぞれに評価規準を設定し、単元の中に順番を決めて設定する。
4	主要な英語表現を決める。
5	単元を通して使える歌やチャンツを決める。
6	教材・教具を作る。 (英語ノートから・オリジナルで) (視覚的・聴覚的・体験的)
7	児童に学習の内容が伝わるように、学習メニューやふりかえりカードを作成する。

CL 型外国語活動授業の展開例

1	挨拶をする。	導入
2	歌やチャンツをする。 (児童の実態に合ったもの)	
3	前回の学習をふりかえりながら、今日の課題や流れを知る。 (児童のふりかえりカードから)	目標理解と活動把握
4	今日の活動を行う。 ・ペアやグループにより協同で行える活動を含む。 ・勝敗でなく、協力したことで成功できるような活動を含む。 ・ゲームのために使う言葉でなく、児童が自分の思いを伝えられるような活動を含む。	協同
5	自分の学びをふりかえり、気づいたことを友だちと共有する。 ・自分の学びをふりかえり、カードに記入する。(数値評価と自由記述) ・学びをグループや全体で共有する。 ・指導者のふりかえりを聞く。	ふりかえり

これらの単元づくり、授業展開を踏まえ、「CL 型外国語活動指導案集 2010」を作成した。この指導案集に掲載した単元一覧は次の通りである。

5年生

1 学期 大単元「自己紹介をしよう」

- ①世界の「こんにちは」を知ろう (授業配当時数 4 時間)
- ②ジェスチャーをしよう (授業配当時数 4 時間)
- ③自己紹介をしよう (授業配当時数 4 時間)

2 学期 大単元「オリジナルを作ろう」

- ④数で遊ぼう (授業配当時数 4 時間)
- ⑤外来語を知ろう (授業配当時数 5 時間)
- ⑥いろいろな衣装を知ろう (授業配当時数 5 時間)

3 学期 大単元「クイズを楽しもう」

- ⑦時間割を作ろう (授業配当時数 4 時間)
- ⑧クイズ大会をしよう (授業配当時数 4 時間)
- ⑨まとめの時間 (授業配当時数 1 時間)

6年生

1 学期 大単元「アルファベットに親しもう」

- ①アルファベットで遊ぼう (授業配当時数 4 時間)
- ②いろいろな文字があることを知ろう (授業配当時数 4 時間)
- ③カレンダーを作ろう (授業配当時数 4 時間)

2 学期 大単元「今の自分のことを紹介しよう」

- ④できることを紹介しよう (授業配当時数 4 時間)
- ⑤行ってみたい国を紹介しよう (授業配当時数 5 時間)
- ⑥自分の一日を紹介しよう (授業配当時数 5 時間)

3 学期 大単元「将来の自分を紹介しよう」

- ⑦将来の夢を紹介しよう (授業配当時数 8 時間)
- ⑧まとめの時間 (授業配当時数 1 時間)

5 CL 型外国語活動の実践と検証

(1) CL 型外国語活動の実践

考案した CL 型外国語活動のデザインを基に作成した「CL 型外国語活動指導案集 2010」を用いて、研究協力校 A・C・D 小学校の 3 校、5・6 年生 10 学級において検証を行った。この 3 校は同一中学校区であるため、その校区の E 中学校においても検証を行った。その結果、児童が自分の成長に気づき、外国語を学びたいという意欲を増しており、学級担任もその変化を自覚しているクラスと、そのような成果があまり見られないクラスがあることが分かった。

児童が自分の成長に気づいているクラスでは、外国語活動の 3 つの柱に対する関心や外国や外国人との触れ合いを志向する「国際的志向性」（八島 2004）、学習そのものが楽しいと感じる「充実志向」（市川 2001）を持つ児童が多くなっていた。そこで、CL 型外国語活動を行った児童の中学校外国語科における学習の様子を調査するため、校区の E 中学校において、授業観察及び生徒へのアンケートを行った。その結果、CL 型外国語活動により「国際的志向性」を持って卒業した児童は、中学校外国語科においても外国語を学びたいという意欲を持ち続け、学習に前向きに取り組んでいることが分かった。これは、八島の先行研究にある『「国際的志向性」を持つ児童生徒は外国語学習に意欲的に取り組む』という結果と一致する。つまり、「国際的志向性」や「充実志向」を持つ児童を増加させる CL 型外国語活動は、「コミュニケーション能力の素地」や中学校外国語科へつながる学びの意欲を養うことができることが分かった。

しかし、その効果はクラスによって差が見られた。その理由を探るため、学級担任へのアンケート及びインタビューを行った結果、指導案が授業のねらいを伝えきれていないこと、指導者や学習者である児童の役割が明確にされなければ、効果があがりにくいということが分かった。それぞれの役割は次の通りである。

(2) 学習者である児童の役割

- ア 学習者である児童は、共に学ぶグループや学級の仲間と協力して活動を進めることが必須である。児童には、自分の気持ちを正直に伝えること、相手の気持ちを受け止めることが求められる。
- イ 学習者である児童は、協同で学習を行うための方法を身に付ける必要がある。学びの質を高めるためには、学習のルールを学ぶ必要がある。
- ウ 学習者である児童は、自分の学びをふりかえることができなくてはならない。ペアやグループの活動において自分はどんな役割を演じ、そこで何を感じたのか。自分自身をふりかえることによってはじめて「なりたい自分」を知り、「どんな努力が必要なのか」に気付くことができる。

(3) 指導者の役割

- ア 指導者は、英語ノート（平成 24 年度以降はそれに代わる新教材“Hi, friends!”）等を用いながら、目の前の児童に合わせたアレンジを施し、単元の目標設定や単元計画の構成を行う必要がある。そして、必要な教材教具等を選択または作成する必要がある。
- イ 外国語活動の 3 つの評価の観点に合わせた単元の目標を設定し、それらを各授業の中でどう取り扱うかを決定しなければならない。
- ウ 学級や児童にあったゲームや活動を選択し、ペアやグループなど活動スタイルを決定しなくてはならない。
- エ 「教える」ことに重きを置くのではなく、それを「導く」姿勢に転換する必要がある。児童の考えを知ることを楽しみ、児童とコミュニケーションすることができなくてはならない。
- オ 知識を喋って「伝える」のではなく、児童の「気づき」を促し、児童のつぶやきをつないで授業の学びが深まるように構成しなくてはならない。
- カ 児童が協同で取り組む価値のある活動や単元のゴール活動、主要な発問を選択し、指導者自身も答えを知らない児童が創造した知識を尊重しなくてはならない。

6 CL型外国語活動の視点の再考

(1) 4つの視点

以上の研究からCL型外国語活動において組み込むべき視点の再考を行った。その結果、①協同的活動、②ふりかえり活動、③創造的活動、④交流活動の4つの視点が見えてきた。

ア 協同的活動 (Cooperative)

協同的な活動として、各授業で行うアクティビティの方法をより具体的に分かりやすく表示し、活動を進める際に必要となるワークシートの例を添付する。

イ 創造的活動 (Creative)

単元の全体像及びゴール活動についての説明を加え、児童が創造的にできるような活動の選択肢を増やしたり、アレンジ例を示したりする。

ウ ふりかえり活動 (Reflective)

児童が実際に行う活動に照らして、児童の側から見た明確な毎時間の目標 (Today's goal) を示し、低、中、高学年で、それぞれ使えるような児童のふり返りカードの例を示す。

エ 交流活動 (Communicative)

コミュニケーション・チャレンジタイムの方法や異文化・異学年交流の例を示す。

(2) CL型外国語活動指導案集 2011

これらをより分かりやすく示すため、「CL型外国語活動指導案集 2010」を、1年生から6年生まで全ての学年におけるCL型外国語活動の実践例及び交流活動例を入れた「CL型外国語活動指導案集 2011」として再編した。この再編は、高知市立第四小学校研究部と協同で行った。

(3) 掲載単元

「CL型外国語活動指導案集 2010」で主教材として使用した「英語ノート」が廃止され、新教材に変更されることが決まったことから、「CL型外国語活動指導案集 2011」には、主教材のアレンジ例として、次のような単元を掲載した。1～4年生の単元は、高学年の英語ノートの活動につながるようなものを選んだ。

- ① CL型外国語活動についての説明
- ② CL型外国語活動における指導者と学習者の役割の説明
- ③ 掲載した単元のつながりの説明
- ④ 第1学年用 単元「数で遊ぼう」
- ⑤ 第1学年用 単元「フルーツや野菜で遊ぼう」
- ⑥ 第2学年用 単元「アルファベットで遊ぼう①」
- ⑦ 第2学年用 単元「何時ですか①」
- ⑧ 第3学年用 単元「アルファベットで遊ぼう②」
- ⑨ 第3学年用 単元「昆虫と遊ぼう」
- ⑩ 第4学年用 単元「何時ですか②」
- ⑪ 第4学年用 単元「オリジナル紙芝居を作ろう」
- ⑫ 第5学年用 単元「クイズ大会をしよう」
- ⑬ 第5学年用 単元「時間割を作ろう」
- ⑭ 第6学年用 単元「アルファベットを探そう」
- ⑮ 第6学年用 単元「自分の一日を紹介しよう」
- ⑯ 第6学年用 単元「20年後の自分を紹介しよう」
- ⑰ 特別支援学級 単元「自己紹介をしよう」
- ⑱ 特別支援学級 単元「クリスマスを楽しもう」
- ⑲ コミュニケーション・チャレンジタイムの説明
- ⑳ 異文化交流・異学年交流の説明

7 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

本研究において考案した CL 型外国語活動とは、英語ノート等の選択した主教材を目の前の児童に合わせて「協同的活動」、「創造的活動」、「ふりかえり活動」、「交流活動」の4つの視点を取り入れながらアレンジを施し、指導者と学習者の役割を明確にしながらか授業を行うという指導法である。この考案を通して、児童と指導者にとって効果的な外国語活動とは何であるかを明らかにしてきた。

児童にとって効果的な外国語活動とは、「コミュニケーションの手段としての外国語にたくさん触れること」であった。外国語を使って人と関わることの楽しさ、難しさ、大切さを体験できるような活動が、学級の仲間との「協同的活動」や「創造的活動」であり、外国人や異学年等との「交流活動」なのである。創造的なゴール活動を設定することで、児童は自分の本当の気持ちを伝えられたり、自分の考えで活動を工夫しながら作ったりすることができる。そして、自分が思いを膨らませて行った活動を「ふりかえり活動」により、その体験を経験として心の中に記憶させていく。ふりかえり活動において、自分が活動の中で何を感じ、何を学び、次に何をしてみたいかを自問自答する力を養うことで、活動の質も上がっていく。このような外国語活動を行うことにより、コミュニケーション能力の素地も養われ、同時に児童が今後外国語を学ぶことへの意欲につながる。

指導者にとって効果的な外国語活動とは、「児童とコミュニケーションしながら協同で創る授業」であった。目の前の児童の声を聴き、それを基に授業創りを行う。そうした授業を創ることができれば、必ず児童に変化が見られ、自分の指導法を見直すことで教師としての成長にもつながる。

外国語活動を効果的に進めるためには上記の4つの活動が重要であり、その視点を踏まえて考案した CL 型外国語活動によって児童のコミュニケーション能力の素地を養うことができること、そのためには、指導者と学習者である児童の役割を明確にすることが大切であること、指導案の中にそれぞれの役割が見えるような記述等が必要であることも分かった。

(2) 今後の課題

「CL 型外国語活動指導案集」の再編を行い、英語ノートに代わる新教材“Hi, friends!”を使って指導案をアレンジする際の例を示したが、その追跡調査はまだ十分ではない。今後の研究においても、授業のねらいが的確に伝わる指導案作りのための持続的な開発を続けていきたい。

本研究においては、その効果を検証する方法として児童の外国語活動の3つの目標に対する関心の変化と学習における志向の変化を採用したが、この指導法がどの程度まで有効であるか、児童及び生徒の身に付けた力を多面的に把握する場面の開発にも取り組みたい。また、「協同的活動」、「創造的活動」、「ふりかえり活動」、「交流活動」の4つの視点の関連やそれぞれの要素がもたらす効果、他にも構成要素として必要なものがあるのかについても探っていきたい。

8 おわりに

2年間にわたる本研究をここまで行うことができたのは、研究の目的を理解し、協力して下さった方々の支えがあったからこそである。まず、自分の今までの実践をふりかえるためにも良い機会であるからと背中を押して下さった前高知市立第四小学校校長 坂本雅幸先生にお礼を申し上げたい。次に、研究とは何であるかも分らない私に、研究者としての姿勢や研究の進め方、また教師としてあるべき態度など多くのことを教えて下さった高知大学 内田純一先生にもお礼を申し上げたい。内田先生との出会いがなかったら、今後の私の研究者として、また教師としての在り方も大きく変わっていたであろう。「学ぶ」とは何であるか、「学ぶ」ことの意味を、現場を離れた高知大学で問いただすことができた。

最後に、研究協力校の先生方と児童にもお礼を申し上げたい。多忙な教育現場において、度重なる打ち合わせやアンケート、インタビューなど、本研究のために多くの時間を割いていただいた。そのおかげで、指導法の考案や指導案の作成を行うことができた。私が見出した指導法は、研究協力校の

先生方と児童の英知の結晶である。その良いところを私はただ拾い集めたに過ぎない。そういう意味で、この研究は小学校教員と小学生による、小学生と小学校教員のための研究であるといえると思う。

ある学級担任の先生が、「この研究を通して、外国語活動は自分にとって子どもたちのために絶対やりたい教科領域になった。」と言って下さった。授業は指導者のためにあるのではなく、児童のためにあると思う。児童の未来へつながる学習を、外国語活動という新領域でも行うことができると私自身確信したし、研究を通してそういう仲間が増えたことは何物にも代えがたい喜びである。研究協力校の児童からは、「先生、こんな機会をぼくたちにくれてありがとう」という言葉をいただいた。この児童らと、研究者と研究対象者ではなく、人として接することができたことをうれしく思う。

教育はいつも現場で休むことなく行われており、日々進歩している。たくさんの支えにより、その一部を切り取って記録することができたとすれば、こんなうれしいことはない。今回の研究において行った実践から改善のサイクルは、教員の日常の取組においても行うべきものである。今後もこの研究の意義を忘れず、実践の意味を概念化できる実践的研究者であるよう努力し続けたい。

引用・参考文献

- ・高知市教育委員会『小学校外国語活動指導案集（第5学年・第6学年）』高知市教育研究所 平成22年
- ・コミュニケーション教育推進会議 平成23年『子どもたちのコミュニケーション能力を育むために～「話し合う・作る・表現する」ワークショップへの取組～コミュニケーション教育推進会議審議経過報告』週刊教育資料 2011年9月
- ・中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）』http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyō/chukyō0/tousin/121628.htm 平成20年
- ・文部科学省『小学校学習指導要領解説（外国語活動編）』東洋館出版社 2008年
- ・文部科学省『初等教育資料（平成22年4月号～平成22年3月号）』東洋館出版社 平成22年
- ・文部科学省『中学校学習指導要領解説（外国語編）』開隆館出版販売 2008年
- ・文部科学省『小学校学習指導要領』文部科学省 平成20年
- ・白畑 知彦、富田 祐一、村野井 仁、若林 茂則『改訂版 英語教育用語辞典』大修館書 1999年
- ・Jack C. Richards and Theodore S. Rodgers 『Approaches and Methods in Language Teaching』Cambridge University Press. 2001年
- ・東野 裕子、高島 英幸『小学校におけるプロジェクト型英語活動の実践と評価』高陵社書 2007年
- ・東野 裕子、高島 英幸『プロジェクト型外国語活動の展開 児童が主体となる課題解決型授業と評価』高陵社 2011年
- ・兼重 昇、直山 木綿子『小学校新学習指導要領の展開 外国語活動編』明治図書出版 2008年
- ・直山 木綿子『英語ノート1を活用した英語活動の授業』小学館 2011年
- ・文部科学省『初等教育資料（平成23年4月号～平成23年12月号）』東洋館出版社 平成23年
- ・文部科学省『英語ノート1・2』教育出版 2009年
- ・プロジェクトアドベンチャージャパン、諸澄 敏之『みんなのPA系ゲーム243』杏林 2005年
- ・八島 智子『外国語コミュニケーションの情意と動機』関西大学出版部 平成16年
- ・市川 伸一『学ぶ意欲の心理学』PHP研究所 2001年
- ・ベネッセコーポレーション『第2回小学校英語に関する基本調査（教員調査）2010』ベネッセコーポレーション 2011年
- ・小学校における英語教育の在り方に関する調査研究委員会『平成20年度 小学校における英語教育の在り方に関する調査研究「スピーキングに関する調査研究」』www.nier.go.jp/shoei_h20/shoei.html 教育課程研究センターにおける報告書 平成21年